

常陸国桜川中・下流域の条里

野村康子

一、はじめに

関東地方の条里制に関しては、芦田伊人<sup>①</sup>・三友国五郎<sup>②</sup>・籠瀬良明<sup>③</sup>・深谷正秋<sup>④</sup>などの研究がある。そして、条里分布図は三友によって一応完成された感があるが、比較的小規模な条里については必ずしも明らかにされていない面がある<sup>⑤</sup>。ここでは、桜川中・下流域における条里の分布範囲の確定と成立条件ととりわけ水利との関連の解明を中心に述べることにする。

二、条里の分布

条里遺構の検出は、二万五千分の一地形図（常陸藤沢・上郷・筑波）および空中写真でおよその範囲を摘出し、その後、五千分の一地形図（「茨城県東西地域平面図」関東農政局利根川水系農業水利調査事務所）、六百分の一・三千分の一地籍図（関係各町村役場所蔵、明治二二年・昭和三四年）によって点検し確認した。

桜川中・下流域については、三友が筑波町付近の条里を指摘している<sup>⑥</sup>。しかし、報告された範囲より下流の条里については触れられていないし、分布範囲が

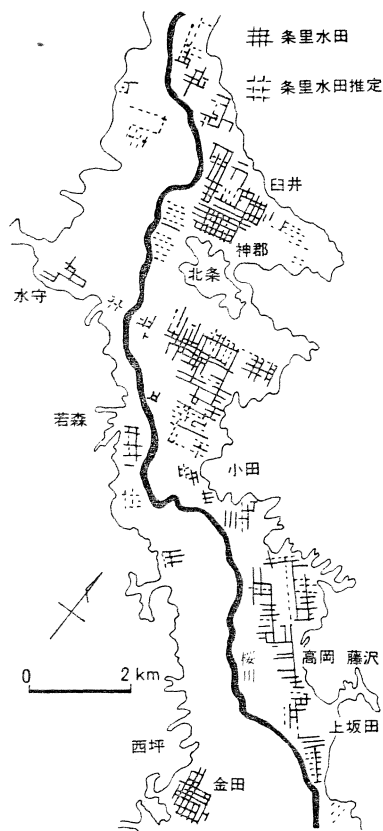


図1. 桜川流域の条里水田

確定されていない<sup>⑦</sup>。筆者の検討によれば、分布範囲はかなり広く、藤沢・坂田・金田などに及んでいることが判明した。地籍図をみると、二反田・三反田・四反田・五反田・一町田・柳町・長町などの条里的名称が見られ、土地は、ほぼ一町四方に区画されており、坪内の地割から考えても条里水田とするのが妥当であろう。条里の分布範囲を示したのが図1である。これを見ると、条里の分布は左岸において三友が指摘した神郡・臼井・大貫・北条付近はもちろんのこと、さらに下流の「倭名抄」の三村郷にあたる小田および中世の南野庄に属する高岡・藤沢・坂田付近にまで及んでいると考えられる。特に条里遺構がはっきりしているのは神郡付近であり、ここは筑波社の神田であったといわれているところである。藤沢・坂田付近の条里は、坪の遺名こそ残存しないが比較的広範囲に検出できる。ただ、藤沢付近の条里水田の土地区画は、非常に乱れていて復原するのに相当困難であった。これらの不整形は、一概にはいえないが桜川の氾濫と無関係ではないと推測される。

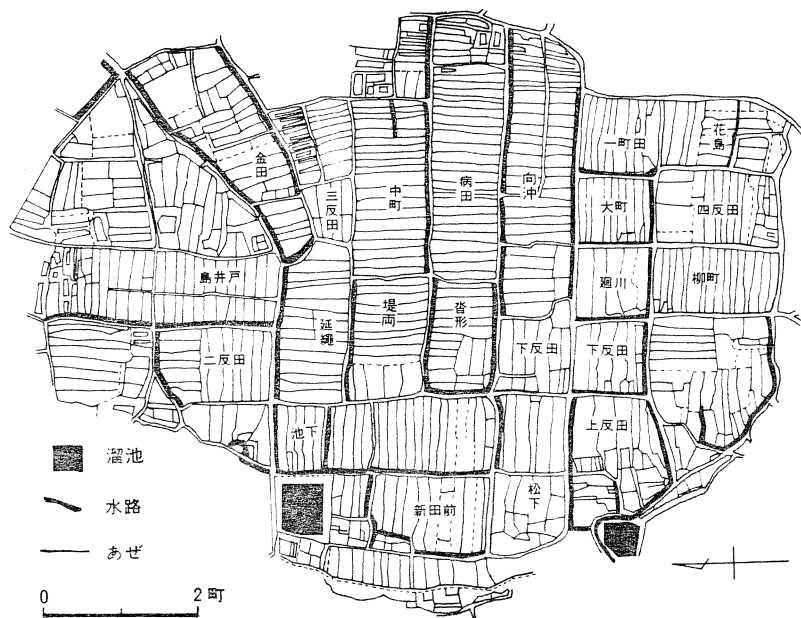


図 2 桜村金田の条里地割

表 1 主な遺跡一覧表

名 称	所在地	概 要
旭台貝塚 西坪遺跡	中根, 上境 西坪	貝層 30 cm, 縄文式土器, 磨打製石斧, 石棒, 石匙, 土偶など 地固め跡が 24 個発見された建築地, 縄文式土器, 土師器, 須恵器, 焼米, 石鏃, 凹石が出土
愛宕塚古墳	栗原	直径 20 m 高さ 4 m の円墳, 縄文式土器, 土師器が散在
十日塚古墳	栗原	直径 23 m 高さ 1 m の円墳
天神塚古墳	上野	全長 80 m の前方後円墳, 縄文式土器, 土師器, 須恵器
どんどん塚古墳	上境	直径 20 m 高さ 2.5 m の円墳, 須恵器片
滝の台古墳	上境	円墳 7~8 基, 円筒埴輪, 人物埴輪, 動物埴輪が出土
西坪台古墳	西坪	円墳 2 基, 埴輪破片が散在
金田古墳	金田	全長 75 m の前方後円墳, 直刀が出土
稲荷前古墳	柴崎	直径 65 m 高さ 2 m の円墳
松塚古墳	松塚	円墳 1 基, 前方後円墳 2 基
鹿島様古墳	吉瀬	前方後円墳
千現塚古墳	大角豆	円墳, 近く土浦市域中村西根に古墳群
台坪才十郎遺跡	栗原	縄文中期の集落址, 縄文式土器, 大凹石, 石皿, 石鏃
大角豆遺跡	下大角豆	縄文式土器, 土師器, 凹石(多孔)
倉掛遺跡	倉掛	土師器, 須恵器が散在
花室遺跡	花室	縄文式土器, 土師器, 須恵器, 凹石, 石皿, 土製装飾品が出土
土器屋遺跡	栄(旧土器屋)	土師器, 須恵器の散布が多い, 内耳土器片
とりおい塚古墳	中根	円墳 1 基
中根遺跡	中根	土師器(古式土師器) 1 個の壺の底には穿孔あり
九重巖寺	東岡	西坪遺跡の西方 300 m, 奈良時代の寺院址と考えられている, 布目瓦が散在

(桜村教育委員会資料より作成)

以上のように、左岸の条里分布は広範囲かつ連続的であり、河岸近くまで及んでいる部分がある。

一方右岸は、広範囲に条里が展開する左岸と対照的な感さえ受ける。その分布は部分的かつ断片的である。すなわち栗原・巨華堂・中管間付近と若森・大曾根・水守の集落が立地する台地の下に、ごくわずかにそれらしいものがみられるのみで、その分布は範囲も狭少であり、坪名も残存しない点から、条里遺構と即断はできない。

しかしながら、坪内の地割が長地型であることや、栗原・水守がそれぞれ「倭名抄」の栗原郷・水守郷にあてられていること、あるいは管間が吉田東伍<sup>8)</sup>によれば、「倭名抄」の諸蒲郷にあてられているなど、その集落起源が古代にまで溯れることから、条里遺構とみなしてよいだろう。中世には田中荘であったといわれる田中付近においては、条里の痕跡は不明瞭であり、現在のところでは断定は避けたい。池田・磯部付近はすでに耕地整理がおこなわれており、その実態を把握することは無理であった。

右岸において、条里遺構がはっきりしているのは桜村である。この地域の条里は、自然堤防に包囲された後背湿地に分布している。地籍図(図2)をみると、畦畔が条里独自の形態をとっており、耕地整理をしたのではないかと思われるほど整然たる条里型土地割を示している。実地踏査の結果からも典型的な条里地域といつてよいだろう。この地域は「倭名抄」にいう河内郡大村郷に属し、周辺には表1にみるごとく、多数の縄文式土器・須恵器・土師器・布目瓦が散布し、その他前方後円墳・円墳など数十基の古墳がある。それらの古墳からは埴輪も出土している。遺構も住居跡・古代の建築地跡

が発見されているなど、古代人の生活舞台となっていたことが推定される。

以上述べてきたように、桜川中・下流域における左岸と右岸の対照的な分布状態は、自然条件の差にもとづくものと思われる。この地域の条里と自然条件の関係については、高木の報告がある<sup>9)</sup>。

### 三、条里水田と水利

過去において、水田地域が成立するためには、水が決定的な役割を担っていたと想定される。そうであるならば、古い時代に成立したと考えられる条里水田の用水源は何であったのか、その点を明らかにする必要がある。

桜川流域の水田地帯の用水源を分類してみると、河川・湧水・溜池・湧水+深井戸・溜池+河川・溜池・深井戸・用水(霞ヶ浦)の七つのタイプに分類される(図3)。この分類図と条里の分布図を合わせてみると、条里が分布しているのは、主として河川利用地域を除いた地域であることがわかる。筑波付近の水田の多くも溜池と

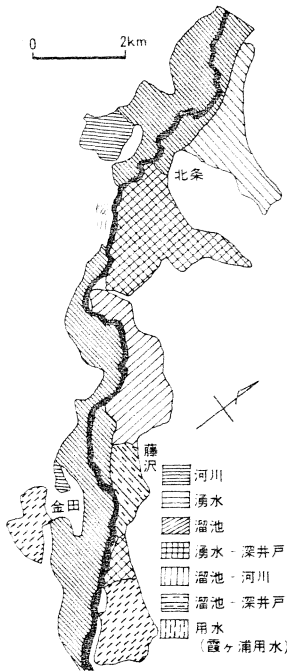


図3. 桜川流域の用水源別分類図

天水が用水源になっている。田土部・藤沢・坂田付近の水田をうるおしているのは、溜池と深井戸である。しかしながら、この地域に多く存在する深井戸の利用は、近世になってからである。古代における水利用の状況は完全に確定はできないが、桜川流域の条里水田においては、溜池と天水または湧水の利用可能な地域であったといつてよいだろう。

桜村の条里地域は、その用水源が何であったか今日確定することはできない。しかし、この地域は昭和四一年に農業水利事業によって鯉ヶ浦から用水を引くまでは、桜川流域の他の地域と同じように、溜池と天水に依存していたと考えられる。おそらく、当時においても台地からの湧水は、溜池を通して灌漑用水として条里水田をうるおしていたにちがいない。西坪集落にみられる正方形の溜池（現在は蓮田になっている）の成立時期は不明である。しかし、条里水田の用水はこの溜池を前提としており、古代におけるこの地域の溜池灌漑の利用を想定させるのである。

ところで、近世の史料によれば、前述のように不安定な自然灌漑を唯一の頼みとしていたために、天明の大飢饉の際に大変な水不足に見舞われ、その時に掘抜井戸を掘ったという記録がみられる<sup>⑩</sup>。

この掘抜井戸は現在でも水田の片隅に残っている<sup>⑪</sup>。また、ほぼ同時期に造られた掘抜井戸が、左岸の条里水田にも見られる。

こうした掘抜井戸は、一時的にせよ水不足を解消させるのに役立つたと思われる。そして、それ以降も掘抜井戸の数は増加したが、それにつれて再び水不足に陥り、昭和九年の旱魃では、この掘抜井戸に風車を取りつけて水を汲みあげている。

以上の資料からみれば、桜村の条里水田は、条里成立前後においても、用水は十分に確保されているとはいえない。早魃期の水不足は深刻であったと考えざるを得ない。溜池はその証左でもあろう。このように水不足に悩まされる地域でありながら、何故古代において、条里水田の対象地域として選定されたかが重要である。

当時の経済的基礎たる水田の開発には、周知のように灌漑施設の造成が主要条件であったと考えられるが、そのためには多量の労働力を必要とした。古代における辺境関東に位置する桜川流域の条里遺構の存在は、溜池の築造を可能にし、条里型土地区画を現出せしめるだけの労働力を動員できる程度の支配力の集中が、当該地域周辺にあったということの意味すると推測される。

しかしその反面、桜川の治水・利水の技術が、当地域の条里成立期においては一般的ではなかった<sup>⑫</sup>、あるいはそれを可能にするだけの労働力を調達できる程度の支配力は持っていなかったとも推測されるのである。すなわち、辺境関東における古代権力の相対的に劣弱な支配力に規定されて、溜池灌漑のような比較的簡単な用水施設しか造成し得なかった。ある程度の水不足に悩まされながらも、微高地によって桜川の氾濫を防ぎうる地形を利用して、条里が実施されたと考えられるのである。そのことはまた、微高地に包囲された後背湿地が、それほどの手を加えないで、相対的には安定した収量を期待しうる生産舞台に転化できることでもあり、そのような可能性を持つ土地がむしろ選ばれたということでもあろう。

#### 四 結 び

桜川中・下流域の条里で明らかになった点は、以下のごとくである。

I 条里の分布については、つぎの二点があげられる。

(1) 条里の分布は、中・下流域においてやや広汎である。その範囲は既に指摘されていた範囲より、さらに下流の藤沢・坂田・桜村金田付近にまで及んでいることが判明した。

(2) 条里の分布は、左岸と右岸で対照的である。すなわち、左岸においてのそれは広範囲、かつ連続的であり、右岸においてのそれは局地的、かつ断片的である。

II 条里水田の成立条件の解明で重要な点としては、つぎの三点があげられよう。

(1) 条里は河川灌漑地域（比較的洪水の影響を受けやすい地域）を避けて施行されている。

(2) 桜村においては、古代条里施行地域では水不足に悩んでいたが、洪水による収量の不安定性と比べればなお有利であった。そのため、洪水を避ける微高地に囲まれた低湿地に施行されたと推測される。

(3) 条里の水利は、当時においては天水・湧水・溜池の組み合わせに限定されているだろう。そして、その背景には、当地域の自然的条件とともに辺境関東の古代権力の相対的な劣弱性があつたと考えられるのである。

III 今後残された問題としては、つぎの二点がある。

(1) 条里が過去における土地区画整理事業であり、地域開発であると考えるならば、当然それを生じせしめた社会的背景を解明

する必要がある。桜川流域においては、地域開発がどの程度のものであり、それに伴う生活圏の拡大がどれ位の範囲であったのかという点も明らかにしたい。

(2) 興味ある問題としては土地所有の問題がある。古くから開発された条里水田の土地所有状況を見ると、桜村の金田では古来からかなり細分化が進んでいる。それに反して、中根・横町では細分化は進んでいない。このように、土地の一区画の形状・細別状態・所有形態などが、最近の筑波研究学園都市などの進出に対して、どのように影響するだろうかという点である。

注

① 芦田伊人（一九一九）「古代武蔵における条里の制とその遺跡」『歴史地理』三三

② 三友国五郎（一九五九）「関東地方の条里」『埼玉大学紀要社会科学編』八

③ 籠瀬良明（一九七三）『低湿地―その開発と変容―』古今書院

④ 深谷正秋（一九三六）「条里の地理的研究」『社会経済史学』六

⑤ 現在わかっている条里地域として、つぎの地域があげられる。

A 恋瀬川流域の条里 この地域の条里は三友国五郎によって概略的に図示されている。筆者の調査によれば、条里水田の範囲はそれほど広くはない。五千分の一地形図および地籍図から判断すると、条里遺構は東野寺・五反田・下志筑・中志筑・高倉付近に

検出できる。B 稲敷郡美浦村の条里 この地域の条里遺構は小規模である。ここは古くは「倭名抄」にいう信太郎に属していた。条里遺構が存在する宮地は地名が示すように神社の御領地であった。

⑤ 前掲②

⑦ その後、『日本地誌』（一九六九）で桜村の条里遺構を指摘している。二一九頁

⑧ 吉田東伍（一九〇七）『大日本地名辞書』坂東

⑨ 高木勇夫（一九七五）「関東地方における河川下流域の地形面と条里について」『日本大学地理学科五十周年記念論文集』九七頁

⑩ 桜村在住の沼尻氏所有の文書による。

⑪ 掘抜井戸の水深は一八メートル位で常に田面と同じであった。地元ではアメリカ掘と呼んでいる。

⑫ 籠瀬良明（一九七三）前掲③一五三頁によれば、「古代における開田・とくに東日本におけるそれは、その低い技術段階を主とする時代の制約から、自然灌漑またはごく初歩の人工灌漑の域を  
出なかつた」という。

○ 歴史地理学紀要第一九号「都市の歴史地理」の編集内容

昭和五二年度の歴史地理学紀要第一九号「都市の歴史地理」の編集内容は左記のとおりで、昭和五二年四月一日に発行の予定です。

四月三・四日に横浜国立大学で開催予定の日本地理学会春季大会に出席される会員は、当日、歴史地理学会の受付で、また四月三〇日・五月一日に広島大学文学部で開催される予定の本会第二〇回大会の受付でもお渡しいたします。

○ 序

藤岡謙二郎

○ 近世後期における神奈川湊ぞい宿村の農間渡世

浅香 幸雄

○ 地方小都市における商店街の変遷―富岡市の場合―

井上 政一

○ 城下町小売商業の盛衰―水戸・川越の場合―

菊地 利夫

○ 国府の「十字街」について

木下 良

○ 戦国末期土佐の地方的中心集落―高岡郡黒岩町の事例研究―

小林健太郎

○ 埼玉県における二〇世紀初頭の織物商分布

田村 正夫

○ 上諏訪宿の困窮過程と地域構造―伝馬役助成としての問屋口銭

土田 良一

○ 近世鳥取藩の城下町

小林 保

○ 榛名神社における門前町の復元と変遷について

南雲 栄治

○ 庄内平野における土族授産事業の展開とその地域的機能に関する

松村 祝男

一 考察

○ 都市の地価に関する立地論的研究と方法論上の諸問題

脇田 武光